

高校生の取り組みの様子

企画4。2日目の午後の企画。高校生が4グループに分かれて、グループワークに取り組む。

青松先生による導入。「医師の仕事は?」「医師の印象は?」の質問に対して、「切る」、「治療する」などと答えて次第にリラックスしてグループワークに進んでいく。グループワークの課題は、「医療面接では何を聴くのか」、「患者さんに話を聴くときに何を聞いたらいいのか」をグループで話し合っ、医療面接で聴く項目のリストをつくる。さらに「身体の診察をするときには、どんなことに気をつけるのか」をグループで考えてみることであった。実際には大学4年生で行う内容であり、高校生には難しいかと思われ、この時点までの説明では、一体何をして良いのか戸惑っていた。ここで、大谷校長の補足説明＝「具合の悪い患者さんがいて、みんなでその患者さんを調べる方法を考えるということですね」により課題について理解することができた。

この次にビデオ＝安井先生扮する東山鶴夫さんが診察を受けている様子が映し出される。40歳の東山鶴夫さんが、「咳と熱が5日ぐらい前から続いている」と医師の青松先生に説明している。この場面に続く医療面接の内容をグループで検討することがこの企画の課題である。用意された資料の中から、グループで相談しながら聞く項目を決めていく。用意された医学書、「ハリソン内科学」・「内科診断学」・「ベイツ診察法」・「マクギー身体診断学」は、高校生には難しいと思われた。しかし、数人の高校生が食い入るように読んでいた姿には驚かされた。専門書を読み、関連する事項を選んでグループで検討し、ポストイットに書きこんで模造紙に貼り付けていく。この内容を報告し、中間発表を行った。

10分の休憩後、さらに自分たちの班の質問事項を精査して、次の実際の医療面接の内容を検討する。診察のためのリストを作成し、代表者一名を決めて、医療面接を行う。医療面接の場面では、各グループの代表1人が白衣を着用し、医師として東山鶴夫(安井先生)さんに質問をしていく。「職業は何ですか」、「たばこはすいますか」、「入院したことはありますか」、「タンは出ますか」、「タンに色はありますか」など、患者(東山鶴夫さん)とのやりとりを体験した。

そして、次に呼吸音聴診シミュレータで「実際」の音も体験。聴診器をつけて、シミュレータの音を確認したり、自分の体内の音を聞いてみたりもした。また、安井先生より呼吸音についての説明も行われた。

「病名があたってなくても気にしないでけっこうです」と青松先生より説明があり、今回の企画のまとめが行われた。医師は、医療面接を行い仮説演繹法により診断していることが説明された。高校生は、実際の体験から「仮説演繹法」を知ることができたが、事後の振り返りにもう少し時間をかけることができたなら、さらに理解を深めることができたと考えられる。(附属学校教諭 山田孝)

